

H. D. ソローの著作群における文明批判の諸相：超 絶主義思想との関連において

林, 南乃加

<https://hdl.handle.net/2324/2198511>

出版情報 : Kyushu University, 2018, 博士 (比較社会文化), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名 : 林 南乃加

論 文 名 : H. D. ソローの著作群における文明批判の諸相：
超絶主義思想との関連において

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本博士論文では、ヘンリー・デイヴィッド・ソロー(Henry David Thoreau)の著作群に見られる文明批判の諸相を、ソローが影響を受けた超絶主義的な思想に照らし合わせて考察した。

第一章では、代表作 *Walden* (1854)の中心的な章“Higher Laws”を取り上げ、形而上学的なソローの考え方を検討した。その際、ソローが重視する“higher laws”(「より高次の法則」)について、歴史的経緯をたどりつつ概念規定をおこなった。この第一章で明らかとなったのは、ソローの思想の根幹に、物質や肉体よりも精神を優位とする考え方が堅持されているということである。ソローは、人間は生来持っている“genius”(「内なる精神」)を尊重し、“higher laws”に則って、より高次の存在になるよう生きるべきであると考えた。こうした考え方は、超絶主義から影響を受けたソロー自身の宗教観や信仰的姿勢に基づいている。この章で論じた内容は、ソローの文明批判の言説の根拠となるものであり、本論文の他の章にも関連している。

第二章では *Walden* を取り上げ、ソローのウォールデン湖畔における簡素な独居生活は、“higher life”(「より高次の生活」)を送るための一つ的手段であったことを論じた。ソローは過度な物質主義が人間の精神に与える弊害を強く批判し、物質文明に浸った生活を拒絶した。ウォールデン湖畔において徹底的に簡素化された衣食住は、ソロー独自の経済哲学に基づくものであり、具体的な家計報告をとおしてより明らかにされたものである。また、ソローの簡素生活を当時の家政学の儉約主義と比較することで時代的な背景を説明するとともに、ソローの実践がそうした社会風潮に対する風刺となっている事実を指摘した。このようなソローのウォールデン湖畔における簡素な居住空間は、ソロー自身の想像力によって、宇宙的な広がりを持つにいたる。ここにおいてソローは神聖で高尚な場所に生きている、高次の存在となった自己を想像する。

第三章では *Cape Cod* (1865)におけるソローの文明批判的な心性について考察した。難破船の記述には、文明人に対する批判的な見解と、人間の肉体よりも精神を優位とするソローの特徴的な考え方が示唆された。また、灯台の光や灯台守の役目を崇高化し、聖書中の光についての記述に関連付けた点や、巡礼始祖の理想化によってアメリカ史を形成しようとした歴史家に批判のまなざしを向けた点などにも、ソローの文明批判的な考え方が表れていることが確認できた。

第四章では *The Maine Woods* (1864)におけるソローの文明的な一側面について考察した。ソローはクタードン山頂やメインの森林に、神々の声や創造主の存在を想像する。またソローはアメリカ先住民とじかに交流を深め、インディアンと文明人を比較し、最終的には両者の間には決定的な差異があるということ学んだ。本著作には、文明人として文明に帰依するソローの姿が浮かび上がるということを論じた。

第五章では“Walking”(1862)において使われる「十字軍」という言葉の比喩が、文明批判の意味

を持つということを論じた。「十字軍」の比喻は、文明社会の弊害から、人間が生来的に持っている神聖な精神を守るという意味を持っている。ソローは、「十字軍」の比喻を使い、「十字軍」の騎士になるよう人々に説いているのだと考えられる。

第六章ではソローの晩年の一著作である“Life without Principle” (1863)を中心とし、ソローの文明批判の思想の行方について考察した。この章で確認されたのは、ソローは晩年になっても依然として、物質文明が人間精神に与える影響を危惧し、批判していたということである。その批判の度合いは、文明人の精神的な死を認めるほど強くなっていた。

以上の考察をとおして、ソローは近代文明が人間の精神に与える弊害を終生、批判していたということが明らかとなった。ソローの文明批判は、物質文明が人間の精神や精神生活に悪影響を与えてしまう限りにおいて、厳しく繰り広げられた。このように、物質文明に対する批判的姿勢が一貫していたのは、精神の崇高性を説く超絶主義が、ソローの思想の根幹において揺るがなかったからである。また同時にソローは、文明や文明人を批判するばかりでなく、人間の精神を守ることや改善策を唱えることで、人間の精神の救済を説いたのである。